

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01773

研究課題名(和文)新タイプ抑うつとひきこもりに関する心理学及び精神医学的前向き研究

研究課題名(英文) Psychological and Psychiatric Prospective Study on the New Type of Depression and Hikikomori

研究代表者

坂本 真士 (SAKAMOTO, Shinji)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20316912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：(1)新タイプ抑うつやひきこもりの素因と考えられる対人過敏傾向(IS)・自己優先志向(PS)について、入社後2年目のPS得点は入社1年目のIS得点から予測されることがわかった。(2)ISやPSが高いながらも適応のよい社員への聞き取り調査の結果、適応のためには、企業の施策が整い、上司や先輩からの親身なサポートが重要であることが示唆された。(3)ひきこもりを早期に発見するために、状態の評価期間を1ヶ月にした質問票を開発し、信頼性と妥当性を確認した。(4)ひきこもり者と健常者を分けるバイオマーカーとして、ビリルビン、アルギニン、オルニチン、アシルカルニチンが有望であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

特に若者は他者からの評価を気にしやすい反面、個人主義的な価値観の浸透により、自己を優先させる傾向は以前より高まっていると思われる。つまり、現代の若者は、ISやPSが高くなりがちで、周囲の対応によっては新タイプ抑うつやひきこもりとして外に現れるだろう。本研究により、ISやPSが高い人への適切な処遇がわかれば、不適応予防に示唆を与えることができ、新タイプ抑うつやひきこもりの予防にもつながると期待される。また、ひきこもりの早期発見のための質問票の開発やバイオマーカーの発見により、精神科臨床における早期治療に活かすことが期待される。

研究成果の概要(英文)：(1) Regarding Interpersonal Sensitivity (IS) and Privileged Self (PS), which are predisposing factors for the new type of depression ("Shin-gata Utsu") and hikikomori, we found that high PS in the first two years of employment is predicted by IS in the first year of employment. (2) The results of interviews with employees with high IS and PS but good adjustment suggested that in order to improve adjustment, company policies should be in place and friendly support from supervisors and senior employees is important. (3) In order to detect hikikomori at an early stage, we developed a questionnaire with a one-month evaluation period for the condition, and confirmed its reliability and validity. (4) Bilirubin, arginine, ornithine, and acylcarnitine were suggested as promising biomarkers for separating hikikomori and healthy subjects.

研究分野：心理学

キーワード：心理学 精神医学 抑うつ ひきこもり バイオマーカー 会社員 適応 新型うつ

1. 研究開始当初の背景

「新型うつ」とも呼ばれる新しいタイプの抑うつ症候群(新タイプ抑うつ)やひきこもりが問題となっている。新タイプの抑うつ者は、仕事に熱心でなく、勤務によって抑うつ状態になり休日や休職期間中には抑うつ状態から回復するが、勤務時には再び抑うつ的となり、復職に困難を来す。また抗うつ薬が効果を示しにくいなど、これまでのうつ病の治療法では治りにくいとされている。また、新タイプ抑うつが進行し会社を退職した後、ひきこもりとなる事例も少なくない。新タイプ抑うつとひきこもりに対し、研究分担者で精神医学者の加藤はいち早く実証的な研究を始めたが(例:Kato et al., 2011) 心理学からの研究は遅れていた。

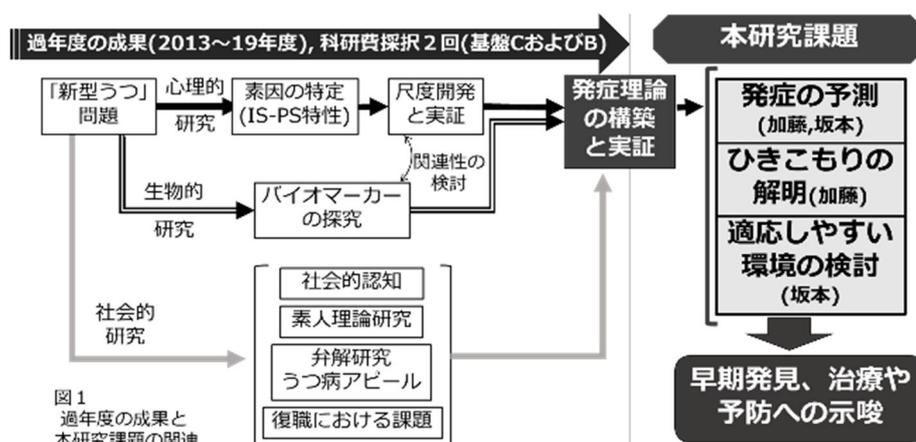
研究代表者(坂本)の研究室では「新型うつ」という言葉が人口に膾炙し始めた2011年頃より新タイプ抑うつについて研究し、仮説モデルを発表し(坂本他, 2014) 多くの実証研究を行って成果を得た(例:村中他, 2017; Sakamoto et al., 2016)。これらの成果をもとに、改めて新タイプ抑うつの発症理論を構築し発表した(坂本・山川, 2020)。理論の核心のみ述べると、対人過敏傾向(Interspersonal Sensitivity, IS; 他者からの評価を過度に気にしたり、他者からの評価に過度に反応したりする傾向)及び、自己優先志向(Privileged Self, PS; 自己の快を他者や集団との関係よりも優先させて追求しようとする傾向)の両方が高いことが新タイプ抑うつの素因(IS-PS特性)であり、この素因をもつ者が職場で対人ストレスを経験し、ストレスに対処しようとするが失敗を繰り返し、新タイプ抑うつを発症する、という内容である。研究代表者(坂本)の研究室では、素因であるIS-PS特性が対人ストレスイベントを媒介して抑うつを悪化させることを示す(村中他, 2019)など、発症理論を支持する多くの結果を得た(結果の一部を速報として2019年度の日心大会自主企画シンポジウムで発表した)。

一方、研究分担者(加藤)は、新タイプ抑うつについて世界に先駆けて研究を始めたが(Kato et al., 2011) 新タイプ抑うつと似た特徴を持つひきこもりについても研究を進めてきた。そして、新タイプ抑うつが進行することでひきこもり状態になること、また、新タイプ抑うつ及びひきこもりのバイオマーカーを発見した(Hayakawa, Kato et al., 2018)。

このように、研究代表者らは、これまで未解明であった新タイプ抑うつ、さらにはひきこもりの発症に関する研究を多数行い、知見を積み重ねてきた。新タイプ抑うつについての実証研究は国内外とも数少なく、先端的な取組をしているが、本研究ではこれまでの研究の流れをさらに推し進め、新タイプ抑うつ及びひきこもりの治療や予防への示唆を得るべく研究を行う。

2. 研究の目的

右図に示したように、本研究には主に3つの目的がある。一つ目は、新タイプ抑うつの発症に関する理論仮説を検証することにより、発症の予測を検討することである。すなわち、IS-PS特性を素因と考え、この素因と、本人と周囲の人



間との相互作用のあり方に着目して研究を進める。二つ目は、ひきこもりの解明を目指すことである。ひきこもり自体は、多様なサブタイプからなるため、ひきこもりのすべての様態を解明することは難しい。本研究では、素因を特定した上で、ひきこもりのメカニズムを解明する。三つ目は、新タイプ抑うつの素因、すなわち IS-PS 特性を持つ人が適応しやすい環境について検討することである。職場不適応について従来は、不適応状態の本人に対して問題が投げかけられ、研究の対象となった。しかし本研究では、本人を取り巻く周囲についても研究し、発症とどのように関連するかを探るとともに、IS-PS 特性が強い者でも適応しやすい環境がどのようなものか探索的に検討する。

最終的に、新タイプ抑うつならびにひきこもりの早期発見、治療や予防への示唆を得ることを目指す。

3. 研究の方法

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症のため、当初の計画を大幅に見直し、以下の方法で研究を行った。

(1) 大学卒業直前から、就職2年目までの前向き研究（量的研究）

新タイプ抑うつは、産業領域（特に大企業）の若手社員において発症しやすいと言われている。これは、大学から会社という環境の変化に対し、適応がうまくいかなかったためであると考えられる。そのため、大学卒業から就職というライフステージの変化に注目した前向き研究をインターネット経由で実施した（表1）。

表1 縦断調査の調査時期についての説明

年度	Time1		Time2	Time3	Time4		Time5	インタビュー	Time6
2020年度	2021年3月 大学卒業	4月 入社	5月 2ヶ月後	6月 3ヶ月後	7月 4ヶ月後		2022年3月 1年後	2022年4-5月 入社1年後	2023年3月 2年後
2021年度	2022年3月 大学卒業	4月 入社	5月 2ヶ月後	6月 3ヶ月後	7月 4ヶ月後		2023年3月 1年後		2024年3月 2年後

まず、大学在学時のIS-PS特性等を測定するために、大学4年生で内定を得ている者を対象に3月にTime1調査を実施した。入社後の変化を詳細に見るために、入社後2-4ヶ月は月1回、調査を行った。その後は、Time1の1年及び2年後に調査を実施した。各回では、勤務状況の他に適応指標（ストレス状況、勤務時間中と勤務時間外の不調など）について質問した。また、Time5と6の調査では、IS-PSを測定する尺度をTime2-4の質問に追加して実施した。

本研究の初年度（2020年度）については全6回の調査が終了しており、回収数はTime1から順に、1178、601、523、369、247、98であった。翌年度（2021年度）から始めた調査については、Time5までの調査がおわっており、回収数はTime1から順に、1180、535、389、338、212であった。

(2) 大学卒業直前から、就職2年目までの前向き研究（質的研究）

本研究で新タイプ抑うつ素因として仮定しているIS-PS特性が新タイプ抑うつ発症につながるためには、環境の要因も関与すると考えられる。人材不足が懸念される中、IS-PS特性の高い人を人材として活かすためにはどのような環境が望ましいかを調べる必要がある。そこで、Time1においてIS-PS特性が比較的高い人で、なおかつ、Time2-5において職場適応がよい人を対象にインターネットを介した1時間程度のインタビューを行い、職場の様子を聴取した。聴取した内容をテキスト化し、グランテッド・セオリー・アプローチ(GTA)法によって質的に分析した。

(3) ひきこもりの早期発見に向けてのツール開発

ひきこもりの早期発見に向けて、より短期間でひきこもりの重症度評価を可能にする尺度が求められる。そこで、研究代表者（坂本）は研究分担者（加藤）と協働して、Teo et al.(2018)による過去6ヶ月のひきこもりの重症度を測定する尺度（25-item Hikikomori questionnaire; HQ-25）に対して、評価期間を1ヶ月にした版（HQ-25M）を作成し、信頼性・妥当性が確認できるかを調べた。2022年3月、ひきこもりを含む762名の男性を対象とし、HQ-25Mを含む質問票にインターネットにて回答してもらった。

(4) バイオマーカー

研究分担者（加藤）は、九州大学病院気分障害ひきこもり外来において被験者をリクルートし、精神医学的評価・心理学的評価に加えて採血による生物学的評価を実施した。ひきこもりに関しては、未服薬のひきこもり者41名と年齢・性別を合致させた健常者42名で血液メタボローム解析を行い、ひきこもり者と健常者の識別、ひきこもり病態の重症度予測、及びひきこもりの層別化に関連する血液バイオマーカーを探索した。

4. 研究成果

(1) 大学卒業直前から、就職2年目までの前向き研究（量的研究）

Time1-6までのデータが揃ったのが2023年3月であり、データの本格的な分析は今後の課題となる。本報告書では、ISとPSが就職前から入社1、2年目までのように変化したのかを、時系列分析法のひとつであるランダム切片交差遅延パネルモデル(RI-CLPM)を用いて報告した（鈴木・坂本,2023）。2020年度から実施した調査のTime1、5、6のデータを用いた。分析対象3時点のうち2時点以上の回答がある278名を分析対象者とした。各時点のIS得点($s > .90$)とPS得点($s > .81$)を用いて、RI-CLPMによる時系列分析を行なった。分析結果をFigure 1に示した($\chi^2(1)=0.15, p=.70; CFI=1.00, RMSEA=.00, SRMR=.006$)。

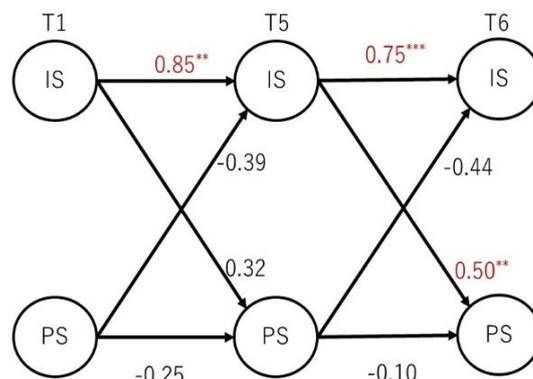


図2 ISとPSによるRI-CLPM(*** $p < .001$, ** $p < .01$)

IS は自己回帰係数が有意であったことから、1 年前の IS が 1 年後の IS を説明することが示唆された。また、T1(大学卒業前)から T5(社会人 1 年目末)では非有意だったものの、T5 から T6(社会人 2 年目末)にかけて IS から PS のパスが有意であり、1 年前の IS が 1 年後の PS を説明することが示唆された。

新入社員は、慣れない環境の中で、IS が高まりやすい状況、すなわち他者からの評価を過度に気にしやすい状況に置かれているかもしれない。T5 の IS が T6 の PS に影響するという結果から、新入社員に対して IS の低減を図ることで PS の上昇を抑え、それがひいては新タイプ抑うつ発生の抑止につながる可能性が示唆された。

(2) 大学卒業直前から、就職 2 年目までの前向き研究 (質的研究)

IS-PS 特性が高く、Time5 にて比較的適応が高い者を対象にインタビューを行った。インタビューでは、現在の業務、職場の新人教育、職場でのストレス、仕事で満足していること・不満なこと、学生時代、就職活動、自身の性格などについて聞き取った。そのうち現状では 3 名分について GTA 法によって分析を終了し、その速報を 2022 年の日本心理学会の公募シンポジウムにて協力研究員・村中が発表した。IS-PS 特性が高い新入社員の適応に対しては、企業の施策(例: キャリア支援、新人教育体制)が整っており、上司や先輩から親身なサポートが得られることが重要であった。このような環境は、自己の役割変化(大学生から会社員への変化)を受け入れる準備を促し(例えば、ストレス・コーピングの獲得)、「社の一員としての自己」役割を芽生えさせ、結果的に自己成長への意識づけにつながっていくという仮説モデルが浮かび上がった。

(3) ひきこもりの早期発見に向けてのツール開発

参加者を回答に基づいて、ひきこもりの状況が一切ない「非ひきこもり群($n = 162$)」、ひきこもりの期間が 6 ヶ月未満の「ひきこもり予備群($n = 48$)」、ひきこもりの期間が 6 ヶ月以上の「ひきこもり群($n = 552$)」に分けた。その結果、HQ-25M の合計点と社会的ひきこもりの期間との間に有意な相関が見られた。また、HQ-25M の合計得点と 3 つの下位尺度の得点の群間差を検討するために、参加者間の 1 要因分散分析を実施した結果、「ひきこもり群」は、「非ひきこもり群」及び「ひきこもり予備群」と比較して、すべての得点で有意に高かった。下位尺度では「孤立」の因子において、「ひきこもり予備群」の方が「非ひきこもり群」と比べて有意な高い値であった。なお、本研究結果は Kato et al. (2022)として公表した。

(4) バイオマーカー

ビリルビン、アルギニン、オルニチン、アシルカルニチンがひきこもり者と健常者との間で有意に違いを認めており(図 3)

男性ひきこもり者では血清アルギナーゼが高値であった。また、血液成分と一般臨床検査値を加えた情報に基づいた機械学習判別モデル(ランダムフォレストモデル)を作成したところ、ひきこもり者と健常者を高い精度で識別することができた。さらに、部分最小二乗法(PLS)-回帰モデルによって、HQ-25 の合計点を高い精度で予測することができ、これらにはアシルカルニチンやアルギニンなどのアミノ酸が寄与していた。ひきこもり者の臨床像に基づく層別化(クラスター分類)には尿酸やコレステロールエステルが寄与していた。これらのひきこもり者を特徴づけるいくつかのバイオマーカーについては、今後、栄養療法などの予防法・支援法の開発が進むことが期待される。また、ひきこもり者とうつ病患者など他の精神疾患との相違点の解明など、生物学的な理解が進むきっかけになることも考えられる。

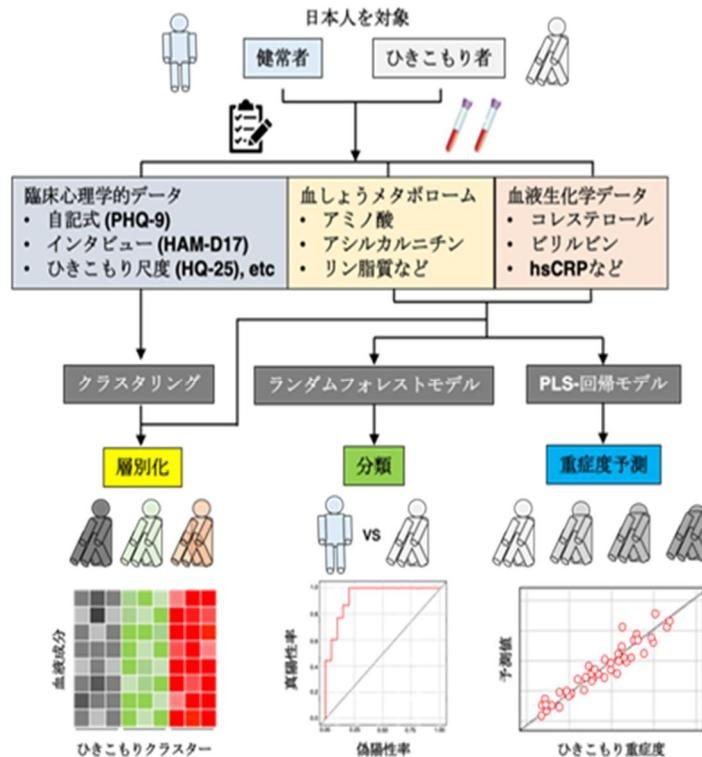


図 3 健常者と引きこもり者のバイオマーカーの比較

引用文献

Hayakawa, K., Kato, T. A., et al. (2018) Blood biomarkers of Hikikomori, a severe social withdrawal syndrome. *Scientific Reports*, 8, 2884.
 Kato, T. A., Shinfuku, N., Fujisawa, D., Tateno, M., Ishida, T., Akiyama, T., & Kanba, S. (2011) Introducing the concept of Modern Depression in Japan: An international case vignette survey. *Journal of Affective Disorders*, 135, 66-76.

- Kato, T. A., Suzuki, Y., Horie, K., Teo, A. R., & Sakamoto, S. (2022) One month version of Hikikomori Questionnaire-25 (HQ-25M): Development and initial validation. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 77, 188-189.
- 村中昌紀 (2022) 対人過敏傾向・自己優先志向を持つ者はどのように適応するか？ インタビューからの知見 日本心理学会第 86 回大会公募シンポジウム SS-026 新しいタイプの抑うつ(「新型うつ」)に関する研究の最前線：対人過敏傾向・自己優先志向からの解明
- 村中昌紀・山川樹・坂本真士 (2017) 対人過敏・自己優先尺度の作成 「新型うつ」の心理学的特徴の測定 . *心理学研究*, 87, 622-632.
- 村中昌紀・山川樹・坂本真士 (2019) 対人過敏傾向・自己優先志向が対人ストレスイベント, 抑うつに及ぼす影響についての縦断的検討 *パーソナリティ研究*, 28, 7-15.
- 坂本真士・村中昌紀・山川樹 (2014) 臨床社会心理学における"自己":「新型うつ」への考察を通して *心理学評論*, 57, 405-429.
- 坂本真士・山川樹 (2020) 対人過敏・自己優先型抑うつの提唱:「新型うつ」の心理学理論 日本大学文理学部人文科学研究所 研究紀要, 99, 109-140.
- Sakamoto, S., Yamakawa, I., & Muranaka, M. (2016) A comparison of perceptions of 'modern-type' and melancholic depression in Japan. *International Journal of Social Psychiatry*, 62, 627-634.
- 鈴木雄大・坂本真士 (2023) 対人過敏傾向と自己優先志向の因果関係の検討 3か年の縦断調査データを用いて 日本パーソナリティ心理学会第 32 回大会(発表予定)
- Teo AR, Chen JI, Kubo H et al. (2018) Development and validation of the 25-item hikikomori questionnaire (HQ-25). *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 72, 780-788.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 11件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Kubo H, Setoyama D, Watabe M, Ohgidani M, Hayakawa K, Kuwano N, Sato-Kasai M, Katsuki R, Kanba S, Kang D, Kato TA	4. 巻 11
2. 論文標題 Plasma acetylcholine and nicotinic acid are correlated with focused preference for photographed females in depressed males: an economic game study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 2199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s41598-020-75115-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂本真士・佐久浩子	4. 巻 35
2. 論文標題 テレワーク導入で大企業に勤める未婚の会社員の心身の調子はどう変わったのか コロナ流行前後に実施した2つの調査の比較	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ストレス科学	6. 最初と最後の頁 238-243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐久浩子・坂本真士	4. 巻 35
2. 論文標題 コロナ禍における管理職（上司）のストレス（1）：テレワーク導入による困りごと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ストレス科学	6. 最初と最後の頁 244-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐久浩子・坂本真士	4. 巻 35
2. 論文標題 コロナ禍における管理職（上司）のストレス（2）：テレワーク導入による困りごとへの対応	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ストレス科学	6. 最初と最後の頁 248-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤隆弘・坂本真士	4. 巻 35
2. 論文標題 コロナ禍における「ひきこもり」「新型/現代型うつ」再考 - 社会回避は悪か?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ストレス科学	6. 最初と最後の頁 263-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本真士・山川樹	4. 巻 35
2. 論文標題 対人過敏傾向・自己優先志向は勤務時間中・時間外による心身の調子の変化と関連するか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Health Psychology Research	6. 最初と最後の頁 83-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11560/jhpr.211213146	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂本真士・山川樹・村中昌紀	4. 巻 104
2. 論文標題 対人過敏傾向・自己優先志向の6つの下位概念に関する基礎研究：それぞれの下位概念はどのように認識されているか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 研究紀要	6. 最初と最後の頁 219-238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 亀山晶子・及川恵・坂本真士	4. 巻 93
2. 論文標題 家族・友人とのサポートのやりとりの維持・促進に向けた心理教育開発の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 545-551
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.93.21315	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kato TA, Suzuki Y, Horie K, Teo AR, Sakamoto S	4. 巻 77
2. 論文標題 One month version of Hikikomori Questionnaire 25 (HQ 25M): Development and initial validation.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences	6. 最初と最後の頁 188-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/pcn.13499	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木雄大・坂本真士・亀山晶子・山川樹・村中昌紀	4. 巻 31
2. 論文標題 対人過敏傾向・自己優先志向と視点取得傾向の関連 大学生を対象とした検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 177-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.31.3.6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kubo H, Katsuki R, Horie K, Yamakawa I, Tateno M, Shinfuku N, Sartorius N, Sakamoto S, Kato TA	4. 巻 29 July
2. 論文標題 Risk factors of hikikomori among office workers during the COVID-19 pandemic: A prospective online survey	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12144-022-03446-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計9件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 坂本真士
2. 発表標題 公募シンポジウムSS-026 これまでの成果と最新知見
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 家族教室
3. 学会等名 一般社団 日本うつ病センター主催 職場・教育現場・家庭におけるメンタルヘルスの促進 - 最初の行動変化とも考えられる社会的ひきこもりへの対応方法 - WEBオンラインセミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 ひきこもりの多面的理解と支援アプローチ
3. 学会等名 社会福祉法人 福岡いのちの電話主催 第19回 2022年度 九州・沖縄地区「いのちの電話相談員ワークショップ福岡」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 こころの応急処置：メンタルヘルス・ファーストエイドの職場での活用
3. 学会等名 中央労働災害防止協会主催 令和4年度 第4回実務向上研修
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 「地域共生社会を見据えた多問題家族の支援」～こころの課題を抱える家族への支援～・メンタルヘルスファーストエイドについて
3. 学会等名 福岡市医師会主催 令和4年度地域包括支援センター研修会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 家族が最初の支援者になるために：身に付けたい5つのステップ「ひ・き・こ・も・り」
3. 学会等名 山口県福祉総合支援センター 精神保健福祉部主催 ひきこもりを考えるフォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 ひきこもりと発達障がいに関連について～その人らしい生活がおくれるために
3. 学会等名 福岡市精神保健福祉センター主催 R4年度ひきこもりを理解する市民講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 家族が最初の支援者になるために：身に付けたい5つのステップ「ひ・き・こ・も・り」
3. 学会等名 高知県精神保健福祉協会主催 第61回高知県精神保健福祉大会「こころの応急処置」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤隆弘
2. 発表標題 ひきこもりの多面的理解に基づく本人・家族支援：深層心理から脳科学まで
3. 学会等名 第16回KHJ全国大会 in 兵庫-KHJ全国ひきこもり家族会連合会・実践交流研修会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 坂本真士	4. 発行年 2022年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 214
3. 書名 「新型うつ」とは何だったのか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	加藤 隆弘 (KATO Takahiro) (70546465)	九州大学・医学研究院・准教授 (17102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	亀山 晶子 (KAMEYAMA Akiko)		
研究 協力者	松浦 隆信 (MATSUURA Takanobu)		
研究 協力者	村中 昌紀 (MURANAKA Masaki)		
研究 協力者	佐久 浩子 (SAKU Hiroko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鈴木 雄大 (SUZUKI Yudai)		
研究協力者	田中 江里子 (TANAKA Eriko)		
研究協力者	山川 樹 (YAMAKAWA Itsuki)		
研究協力者	堀江 和正 (HORIE Kazumasa)		
研究協力者	香月 亮子 (KATSUKI Ryoko)		
研究協力者	瀬戸山 大樹 (SETOYAMA Daiki)		
研究協力者	松島 敏夫 (MATSUSHIMA Toshio)		
研究協力者	松尾 敬太郎 (MATSUO Keitaro)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	久良木 聡太 (KYURAGI Sota)		
研究協力者	久保 大聖 (KUBO Taisei)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関